

同志社のマークの意味

——新島 襄、デヴィス、ラーネットの

三先生を想いつつ——

住 谷 悦 治

は し が き

わたくしは同志社総長という身に余る役職についてあまり時の経たぬころ、「学生諸君に語る——同志社学園の一角に立ちて——」という題名のもとに十四頁の感想と、総長就任の辞としての「五つの憲章」という原稿と、「学生歓迎の辞」（これは一九六四年、四月八日、栄光館での挨拶とNHKで一九六五年一月七日、十四日、十五日、十六日の放送録音とをあわせて、全四十頁の小さいパンフレットを同志社本部から刊行して貰った。教千部印刷したらしく、その年入学した新入生には全部配布し、なお、学内各部教職員室にも配布したことがある。そのころまだ「社会学概論」などという特殊の科目を担当すべき専門の教師が見当たらないため大教室で毎週一回四百人か五百人あまり（出席者数）の学生に講義していた。秋ころになってわたくしが新入生に配布

した「学生諸君に語る」（それにはニーチェをまねて出過ぎた言葉であるが“Also sprach Suniya” などという表題まで添加した）のを読んでくれたか、と大教室でフト聞いてみたら三、四人だけ挙手した。わたくしはまったくガツカリした。同時に、「自分の書いたものは、自分の親しい友人と、自分だけが読むていどのものだ」という長年のわたくしの考えが実証されたような気がした。現に過去何十年、わたくしはいくたの著者、学者から著書や論文の抜き刷りを贈呈されても、全部を読むわけではなく、とくに読みたいと思うものだけを読んできた事実と思いくらべて、ものを書くということの空しさや困難さを痛感し、多くの読者をもつ文筆家、学者を尊敬もし羨ましくも思うひとりである。前々号の「同志社時報」にもそうしたことを「書かずもがなのはしがり」として一文を発表したことがある。

わたくしは身のほどもわきまえず余りに多く同志社のこと、新

島先生のことを書きすぎたようだ。新聞や雑誌に発表した同志社や新島先生や同志社の優れた先輩たちのことを、収録した随筆集「同志社の一隅から」、「あるところの歴史」、「鵜肋の籠（けいろくのかご）」の三冊だけを繕いてもこのことは実証されよう。

それを思うたびにこころは重く痛む。自分あまり空しい理想主義者なのであるか、同志社全学園へのあまりに楽観的であつたり認識不足であつたためか。いうまでもなく凡庸として筆力の乏しさは当然であるが、それでも愛する同志社、自分を育ててくれた同志社、多くの優れた先輩や、人に知られずによくことをして逝いた先輩、現在そうした運命を負いつつある人びとのことを想うと、何回でも同志社学園の若い人びとに、同志社の歴史と社会意識とをより深く広く知って、創立者新島先生のご意図に協力して行かねば同志社に関係を有ち関係を深めつつある甲斐も意義もないのだと感じていつでも、頼まれれば快く書き、自分の手におえる問題であれば私見も述べつもりでいる。この何行かも、老いの繰り言だといわれればそれまでで、一言の弁解の言葉も無い。

一、同志社のマークの由来

同志社に関係をもった人は、だれでも恐らく、同志社の表章であるいわゆる「三ツ葉のクロバー」と俗に言われる美しいマークに魅せられるであろう。わたくしは大正十一年（一九二二年）四月にはじめて当時の同志社大学法学部助手として採用され、専門の勉強とその傍ら、予科三年生の経済学（必ず英書を使用した）

を担当した。そのころの話は、いままでいくどか詳しく書いたし、自分の随筆集にも収録されているから繰返しを避けるが、そのころ法学部の財政学担当に和田武という特質のある先生がいたが、いま六、七十才ほどになった卒業生なら覚えている筈である。この和田教授は、当時の東京帝国大学学生時代に、田辺忠男と、本位田祥男（いずれも戦時中有名だった）とともに「秀才三羽鳥」と称せられたという噂のあつた先生である。その和田武先生の逸話は相当に興味あるものが語られたが、ある時、教室で「同志社大学の学生はどうも勉強が足りないのじゃないかね。だけれど、同志社のマークはいいね。実に美しくっていいね、徽章としては秀抜だ」と語つたということを、当時わたくしの家へよく遊びに来た当時の応援団長高橋終一君（新潟県弥彦神社神主の息子で数年前逝去した）が、わたくしに語つて、二人して「ほんとうにそうだね。素晴らしいね」と話し合つたことがある。しかし、三ツ葉のクロバーを形取つたものだらけの俗説しか知らなかった。同志社の歌にもそういった文句があつた。いつのころからか、わたくしは覚えがないが、同志社のマークは同志社の教育の本旨としての「知育・徳育・体育」を象徴するものださうだといふことを知つた。しかし、知育・徳育・体育を教育上の重要な問題と考へないような学校は、何千、何万の日本の学校にはないだらう。それほど当然なあまりにも平凡な基本的なものだからである。ところが、同志社ではそれが特質あるものと誇りうるのは、徳育ということが、キリスト教精神をもって貫かれていて、という一事であるといわれている。それに違いない。キリスト教精神

を基本とすることは、新島先生が、同志社創立以前から、そして創立当時から、さらに、大学設立の旨意書にも、先生の遺言書にもはっきりと述べられているのであるから。またそれが、同志社精神高揚のためのうたい言葉である。誰れが、何日ごろ、三ツ葉のクローバーによって模様がかたどられた同志社のマーク——三角を三つ結びつけた美しいマーク——が知・徳・体を意味するものだと言語したのであるうか。正確には歴史的にいつのころから、誰れによって、知・徳・体が同志社のマークの意味するところだと唱えたのであろうか？ わたくしは知らないし、誰れも教えてくれた人がいない。

わたくしは総長に就任してから、多くの男女の大学・高等学校・商業高等学校の標語を集めて書き写したノートを有っているが、どれもこれも、実に立派な学校設立の精神を示すもので、時に感嘆久しくすることさえある。もちろん同志社のそれも簡明で優抜であるに違いない。

わたくしは、もちろんそのことに何ら批判も反対もしないし、甚だ結構でさえあり、讃えることを惜しまない。しかし、時々、こうしたマークの意味を固定してしまつてうごきのとれぬものにして困ることはないだろうか、などとフト考えたことがあり、ある時——いやたびたび——教育で、同志社のマークにわたくしは、キリスト教学園として、「父と子と聖霊」ということや、「望と愛と信仰」という聖書の中に強調されている言葉をダブらせて考え、そのマークを自戒の念ともしたいものだといって、いわゆるキリスト教の三位一体とか、それが思考乃至科学方法論と

しての弁証法とも一致するのではないかというようなことを述べたことがある。解釈は自由であつていい。その表象されたマークは素晴らしいのだから。

二、現実に、生身（なまみ）で 生き抜いた三先生を想う

同志社のマークに一つの伝説が、事実のごとく語りつたえられ信じられていることがある。それは、事実としては、湯浅半月（本名吉郎）が、同志社初期に産んだ芸術家として、この同志社マークを創案したのであるということ。湯浅半月は明治中期に群馬県の廃娼運動について県の青年たちを指導してその目的を達した知名の人物である湯浅治郎の令弟である。湯浅治郎は明治時代の第一議会に群馬県から選出された政治家で、群馬県の名望家であり、長く県会議長をも勤めた名士であるのみでなく、新島先生がアメリカの留学を卒えて初めて郷里安中に帰省したばかりのとき、若き日に、新島先生からキリスト教の洗礼を受け生涯その精神を実践した人である。同志社の財政が窮乏に陥ったときには一家を挙げて京都に引き移り、その経営と財務の才幹を発揮して功績を挙げた同志社の恩人であり、郷里では新島襄・内村鑑三・湯浅治郎を明治・大正・昭和のキリスト教界の三傑とさえいわれている。治郎翁が組合教会への献身、教会の設立、など、ここではないっさい触れないが、一言、同志社教育について現在でも傾聴に値する大胆・明快な理想主義と高度のヒューマニズムに燃えた良心の見解をば九ヶ条にわたって、「上毛教会月報」四〇五号に発

表したことや、明治三十年前後のアメリカン・ボードとの、キリスト教主義の学校の徴兵猶予の特典拒否についての文部省の教育方針の衝突にさいし、湯浅翁の功績ということだけに一言触れておく。(詳細は、拙著「同志社の一隅から」参照)

湯浅半月(吉郎)は前述のごとくこの湯浅治郎の令弟で、前々同志社総長湯浅八郎先生の叔父に当る。八郎総長は治郎翁の第八子であり、叔父半月の次女で同志社女子大学の福原春代先生(現存)とはいとこ関係であり、湯浅永年先生は春代先生の令兄である。

わたくしが、いまこのような姻戚系譜などを略記した理由は、同志社マークの創案者湯浅半月が福原春代先生の尊父であり、湯浅八郎先生と現に親しく家庭ぐるみに往復しており、時に父半月の思い出を語ることはもちろん、問われれば記憶を辿って答えるという立場にあられるからである。

わたくしが、このテーマで短文を書こうとしたさい、湯浅八郎先生に同志社大先輩の半月が、新島家の笹龍胆ささりゅうたんの紋所のデザインを、いろいろと画き変えて、結局、現在のような三角を三つ結びつけるように単純化し芸術的なデザイン創造力を発揮したのだからであるが、先生はどうお考えでしようか、と質問を呈呈した。

湯浅先生は「どうもその説は怪しいし、新島家の笹龍胆の紋所(笹龍胆の笹の葉は五葉)をいくら単純化しても、それは無理でしょう。何かアッシリアの文字からヒントを得たとか聞いていますが、正確なところは、あとで調べてみましょう」というようなお話であった。ところが偶然にも、その夜(一九七二年一月一四

日)、湯浅先生から電話があり、「さきほどから福原春代さんがお訪ね下さって、談たまたま、父半月の創案したという同志社のマークのことに及びました。ところが、春代さんのご記憶によると、父(吉郎半月)は、あの品のマークはアッシリアの「楔形文字」からヒントを得たもので、その文字は「国土」というものを意味するのだとのことであるということをお父半月が語ったことを覚えていました」とのお話であった。湯浅先生がフトおっしゃったことと正に符合するもので、恐らくこの説が出典(?)とか原典とかいうことに係るのではあるまいか。したがって文学的な三ツ葉のクロバーのデザインという平凡、通俗な説も新島家の紋所をいろいろ工夫し、崩し、変形したデザインであるとの憶測説も、何れも、採るに値しない俗説であるというのほかはないと思われる。現在わたくしは何かしら気にかかりつつあった長い間の薄曇りが取り払われて清々(すがすが)しい気持ちで晴天のもとに立つ思いがする。

三、新島先生の「勇氣」、デビス先生の「情熱」、ラーネッド先生の「知性」を思う

最後の問題は、ではこの同志社マークをいかに意味づけ、いかに理解し、いかに同志社人が、体感しつつ人間として成長し、人間教育の本旨を完うするために凝視・沈思すべきかであるが、わたくしはいつも人びとに説教する資格も力量もないと自覚自省し、そのような意味で説教というものをしたことは殆んど稀れで

あると思つている。ただ自らの感想を述べることは自由であり、他の人びとを強制するものでなく、むしろ問題を提出して批判を受けつつ自らの魂の成長に資したいとつねに念願し、実行してきつたつもりである。一般的の意味で、わたくしはけつして教育者ではない。平素からもし教育なるものを実践するならば、わたくしは「教えられるものの真の自己解放を期待している」のである。したがってわたくしに出来ることは、自分の志すところ、自分の考へるところ、自分の為さんとするところを自由に語ることであると思つている。だからいま同志社のマークについて考へていることも、以前からいくたびか教室で言つたり人前で感想を述べたりしたことを繰返すにすぎない。

わたくしは同志社へ採用されて以来、中瀬古六郎先生に教えられたところが多い。とくに同志社の初期において、知育、情育、意育の三大薫育が、三人の偉大なる人格者に依つて代表されておつた、というお話で、これをわたくしは、最初直接に先生のテールスピーチによつて、つぎには先生の書かれたものによつて実に深い感銘を受けていて、いまも先生の語られたお姿が鮮かに脳裡に描かれている。先生は欧米の語学に通じ、大著「世界化学史」を公刊しているが、漢字の素養が深く、スピーチは漢文口調の美辞麗句がごく普通に口をついて語られる。中瀬古先生は説かれた。「創立当時の三大薫育者として代表された先生——即ち新島先生は渾身、是れ意志の人であつて、其の徹底せる意志が即ち同志社其ものの意志であり、此の意志に依つて同志社の趣旨、目的、方針、経綸が統一せられたのである。先生の歌が之を示して

居る。

石鉄も透れかしとて一寸ぢに

射る矢にこむる真丈夫の意地

デビス先生に至つては、満身、是れ火、是れ熱、是れ情の人であつた。彼が一朝義憤を懐き、劍を提げて起つたのは、彼の奴隸解放南北戦争の時であつた。後年彼が同志社の時局に深憂を抱くや、終夜祈りては泣き、泣きては祈り、朝起きたるときは、枕頭は熱涙にズブ濡れになつて居ること、一再にあらざりしと云うではないか。東洋的の語を以て之を云へば、デビスの眼に輝くは、一滴の紅涙にはあらで、真に湧沓として流るる萬斛の熱涙であつた。

デビス先生を以て情熱の権化であり、疾風迅雷でありとすれば、わがラーネッド先生は、泰然として動かざる山であり、雨降らば降れ、風吹かば吹け、ラーネッド先生こそは千秋萬古、高塵界を抜いて雲外に静立する大岳秀嶺である。過去五十五年、同志社の歴史には、波瀾重疊、紛糾錯綜、校難踵を接して至れることも頻々であつたが、此の間独りラーネッド先生のみは、深く同志社の使命を信じ、天佑の常に此校の上にあるを念じ、敢て騒がず、敢て驚かず、敢て狼狽せず、唯孜々吃々として聖典の註釈と神学の講とに没頭して、泣かず、哀しまず、悠々として光明の雲間に漏れ出るを待たれたのである。…一面よりラーネッド老先生を思うと、彼海遠く沖合の波間に陰顕する巨巖の如き感じがする。疾風叫び、怒濤の狂える時は見えないが、波静まり風和らげる後から見れば、依然として元の所に其の崇高なる存在を示現す

るのである」(後略)

中瀬古博士の三先生に対する観察はまことに適格であり、その文章の魅力は、同志社のために生き抜いた三先生の生命自体の生々しい事実を体感せしめる。これ以上、敢えてわたくしの贅言を必要としない。

同志社のマークの包含する意味についての意見はさまざまであり、それぞれ有意義ではあるが、わたくしは、ただ抽象的に、知育、体育をあげつらうよりも、現実に創立当時から困難を極めた校運の只中であつてそれぞれ時に応じて指導的な立場を採り、幹部・校友とともに協力を強めつづけた優ぐれた三先生の生々しい生ける人格を同志社のマークの中に密接不可分に融合調和せしめつつ、その表象のうちにダブらせつつ、同志社のマークを凝視し、その光栄を讃えたい。東京より初めて来て教壇に立った和田武教授の讃嘆を俟たずとも、このマークがまことに優ぐれた美しさであることを同志社人は認識していることである。このわが「国土」を意味するマークの上に、優ぐれた精神文化の華を光輝せしめることこそ、われら同志社人の昼夜、渾身のつとむべきではあるまいか。しかもその本質は、新島先生が繰返し説述高調しているキリスト教精神を基調とした教育であることにその特殊性を見る。特殊性は普遍性を基底としてのみ意味があるので、単なる差別性ではないことはいうまでもない。教育の普遍性とは共通なる大学教課のすべてであり、世界いづれの大学においても必ず目的とする学問・知識・技術であり、学問としては理論性と実證性とを全き性格としているところのものである。同志社学園一般

・大学教育のすべてはこの普遍性を基底として体得するとともに新島先生の強調されたあらゆる同志社の特殊性・良心の全身に充滿したるますらお、陰日向なく、誠実をもって貫く人物として邦家に貢献する人物となることを念願することである。同志社のマークはこうした人生的態度を生きた生命力をもってつねに創立当時の偉大な三先生が鞭撻してくれているのではあるまいか。

長い歴史を通じて毎年、立派な宣誓と覚悟をもつて同志社に入學した時の「感激」と「初心」とを忘るべきではあるまいと思ふ。

おわりに

最後に重ねてもう一言、平素の感想を述べさせていだきたい。それは誰れがどこかで言ったのを聞いた言葉かは覚えていないうちに、いつの間にか弱々しい性格のわたくしの人生標語となつてしまつたような言葉である。——人間はどんな弱点があつても、自分がどんな貧しい才能だと思ひこんでいても、自分にはとても何ごとでもそのような大きな理想的な仕事なり、希望なり、責任なりは果たせそうもなしと思つたり、他人にくらべていろいろの点に自分のコンプレックスを感じたとしても、断じて「あきらめ」ぬことである。いわば「一生涯あきらめとのたたかい」をつづけてつぎ抜くことである。手足の不自由な人、視力のよわい人、盲人、中途盲人、聾啞、あるいは言語障害、いっさいの身障者がいま数十万人、どんなに苦悩とたたかいつづけてつづつ各種の職業を習熟して自己を確立し、世のためにつくし、自らを役立

てよう、そして生き抜こうと努力していることを想えば、無事に大学を卒業しえた幸福な人びとは、もっとどれほど多くをまじめに働かなければならぬかに思いたるだろうということである。たまたまわたくしは盲人施設関係の京都ライト・ハウスの理事長（館長）を名儀だけでも引き受けて、あの優れた鳥井篤太郎先生のおとの役職についている。多くの盲人の先生や青年男女たちの実際に触れて、ことにこの感を深くしている。とくに世界的に普及した点字を苦心惨憺して、「あきらめること」とたまたかいつづけて発明した三才からの盲人、ルイ・ブライユ Louis Braille (1809~1852) の伝記を読み、その研究の専門家・医博、守屋正先生に、フランスにおける多くの完備した施設の実写写真を見せられ、教えられ、日本における盲人問題の歴史なども読んだり教えられたりして、人間はいかなる自己の微力、無力にも断じて「あきらめ」のころを感ずることなくあきらめとのたたかいを心に誓うべきだと考えている。

大学の「卒業証書」は大学の教科課程を一応修めたという証書であるが、わたくしは卒業生がその証書を凝視して真に自分は大學生として「卒業」したのかどうかを再考すべきではないか。そして同志社のマークの意味する「国土」の上に、真によき社会をつくりあげるために、真に平和と民主主義の滲透する社会をつくりあげるために、これからこそ自分らが努力精進しなければならぬ第一歩であることを考えて欲しい。昨年度（一九七一年）から大学の卒業証書からは「総長名」は大学当局の方針によって削除されているが、そのような名儀上のことや形式上のごとに諸君は

捉われたり、顧慮したりすることなく、総長としてのわたくしは、微力にして至らぬながらも全同志社の学園（学校と生活共同体）との教学の責任者として永く新しい卒業生をも含めてオール同志社の健全な繁栄と発展を忘れる者ではないということ、新島襄先生はじめ創立当時から協力したデビス先生、ラーネッド先生たち、山本覚馬翁や第一期の卒業生、熊本バンドの優れた青年たち、その後につづく九十五年間にわたる多くの卒業生で世のために生涯を捧げた有名の方々、名も知られず同志社精神を心に体して忠実に働らきつづけてこの世を去って行った多くの先輩たち、恐らくそれらのすべての人びとは「あきらめる」ことなしに、たとえ、平和も民主主義も、よりよき社会も、恐らくはそう近いうちに実現しそうもないから、と安易なひとりぎめをして「あきらめる」ことのなき勇氣と、意志と、知性と情熱とそして、そのすべてを通じて「良心」をもって貫いたのに違いない。これははじめに述べたように訓辞とか説教とか、偉らそうに壇上から述べる言葉ではない。たゆまなく、平均人として、なお努力しつつあるささやかな同志社人としての、わたくしの平素の感懐である。

（同志社総長）



同志社生活五十六年の回想

田 畑 忍

(一)
同志社生活五十六年が過ぎ去った。然し、ロングタイムの半世紀といった感じはしない。

同志社中学（大正六年—九年）四年、同志社大学（大正九年—昭和二年、うち二年間は病気で休学）七年の、合せて十一年が学生時代で、あとの四十五年間（昭和二年—昭和四十七年）を教職員として終始した。

私を同志社中学に半ば強制的に入學させたのは、高木庄太郎先生（大学で政治史の講義を担当された）であった。波多野培根先生・加藤延年先生・三輪源造先生・鈴木吉満先生・前窪勝之助先生等に教えを受けたほか、社長原田助先生・山室軍平先生・海老名弾正

先生・賀川豊彦先生・吉野作造先生等の説教や講演を聞くことができた私は、同志社ほど良い学校はないと思った。従って当然に、同志社以外の大学は私の眼中になかった。そして同志社大学卒業と同時に、同志社大学教員に採用されることになったのである。

(二)

最初大学予科では神学生であり、病氣復してのちに政治学科に転部した。高木先生のほかに、中島重先生（憲法・国家論・法理学・独書講読）・今中次麿先生（政治学・政治学史）・田村徳治先生（行政学）・林要先生（社会問題・独書講読）・長谷部文雄先生（経済原論）・住谷悦治先生（経済学史）の講義に啓発されるところが大であった。殊に中島

先生と林先生の独書講読とおして、テニスやフイアーカントやマルクスの社会思想に触れて学問的関心が強くなったが、進んで学究生活に入ろうとは思わなかった。ただ、高木先生・中島先生・黒川先生等のお考えで教授会の決定があり、それに従ったまでである。

(三)

専攻は政治史・政治学であったが、中島先生が関西学院大学に移られたので、教授会命令で憲法も担当することになった。佐々木惣一先生から憲法を学ぶようになったのは、憲法専攻のことを聞かれた先生の招きで、その公法研究会に入れていただいたことによるのである。

この公法研究会には、恒藤恭先生・滝川幸辰先生・末川博先生・田村徳治先生などと、磯崎辰五郎（行政法）・大石義雄（憲法）・中谷敬寿（法理学・公法学）・川上敬逸（国際公法）・森順次（憲法）・俵静夫（憲法・行政法）・原龍之助（行政法）・大岩誠（政治学史）・加古祐次郎（法哲学）・田中直吉（外交史）等の諸君が居られ、自由潑潑たる学問の雰囲気の中で、いわゆる京都学派の学風に親しむようになった。

佐々木先生が「公法雜誌」を始められるようになってから、研究会は一段と活発になり、私はその創刊号に『独裁政理論の一定型』という論文を寄稿することを得た。そして廢刊（昭和二十一年）までに、十数篇の論文や判例批評を掲載させていただいた。佐々木先生に最も感心したことの一つは、先生が人の差別をされず、従って大学についても官私を問わず差別されなかったことである。私は新島先生の自由平等と愛の教育精神を、佐々木先生から極めて具体的に教えられたのである。

(四)

その間、滝川事件があり、天皇機関説事件があった。滝川事件では、佐々木・宮本（英雄）・滝川・末川・恒藤・田村・森口の諸生から助教・助手・副手にいたるまでの研究者が揃って退官され、その主力の立命館大学への移動があり、佐々木先生がその学長になられたので、立命館大学はアカデミックな傾向を非常に強くもつようになった。

ところが、美濃部天皇機関説問題が波及し、佐々木先生は時局便乗の立命館経営者と意見が合わなくなり、二年足らずで書齋に帰られた。佐々木先生の『日本憲法要論』や私の『帝國憲法逐条要義』も発行禁止になり、同志社理事会は私の憲法論に目を光らすようになった。しかし大先輩の浮田和民博士・三宅驥一博士・深井英五氏等は私の強い味方であった。

更に、その後、法学部内の思想的派閥的対立が次第に激化して、長谷部先生と住谷先生が学外に去り、林要先生もまた野村重臣君・古屋美貞教授・瀬川次郎教授の罷免につづいて、マルキストということで辞職された。そして、私の憲法書は、美濃部憲法以上の悪逆憲法だという非難の迫打ちをかけられて、湯

浅八郎総（学）長も私の罷免を一時は考えられたようであった。ところが、対立両派が、中島今朝吾憲兵司令官に総長要請で会見することになり、滅茶を言う中島中将に私が食ってかかったことから、逆に中将は私を庇うようになり、そのため総長は、一年間（昭和十二年）の休職と、東京の精神文化研究所に私をあづけて「神ながらの道」の寛克彦博士の憲法学を勉強させることを考え、そのように私にアドヴァイスされた。もちろん非常な好意の策であった。然し私は、休職処分を受けて東京へ行ったが、幾度言われても右のアドヴァイスに従わなかった。そのうちに湯浅博士自身辞職されて、上谷統氏が代行となり、結局、牧野虎次総長が就任され、その判断と黒川先生（法学部長）の配慮で、九月になって、一年半ぶりで帰学することができた。

(五)

教授になったのは、昭和十四年で、私は授会の民主化と融和のために努力をした。そのうちに日本は、中国侵略戦争から大東亜戦争に突入した。湯浅総長の時代に、御真影を奉戴し奉安殿を造営して日直宿直制がつくら

れていたが、昭和十七年法学部長になった私は、最初の学部長・校長会で、法学部にかんするかぎり、その事務の責任者である私が日直・宿直を全部引受ける代りに、教員の日直・宿直をやめることにしたいという提案をした。牧野先生が激怒されたことは是非もないが、予備役海軍大佐の野村中学長が私の提案を全面的に支持されたので提案どおりの結果になった。「神聖なる御真影宿直を事務だという非国民を憲兵隊に訴える」と言った者もあった由で、私は憲兵との喧嘩を覚悟したが、彼らがやってこなかったのは、私の考えを正しいと見たのにちがいない。造言蜚語罪に問われた河原政勝教授（国際法）を起訴から救うことにも牧野先生の協力で成功することを得た。時の学長は黒川先生であった。

黒川学長は軍事教練に熱心で、教員に中隊長や大隊長をやらせていたが、そのような大学は他にはなかった。小隊長をやっていた学生の滝川春雄君等も、もちろんこれを喜ばない。私は、それをやめさせるために、執拗に黒川学長に迫ったが、軍部追隨の方針を変え得なかった。一年経って私は微熱が出るようになり、近江八幡のサナトリウムに入院し

た。病院の前庭で繰り上げ卒業の滝川君（大阪高裁判事）・熊谷開作君（大阪大学教授）・藤井健二君（萬成証券社長）等の口答試問をしたことが昨日のように思えてならない。

戦局が愈々不利になり、カリエスになっていった昭和二十年に、私は家族と家財を富山に疎開した。大学は女子学生と身体不自由の学生だけになってしまったが、私はコルセットを嵌めて講義をつづけていた。その後、田村徳治先生を所長とした同志社大学研究所員として、明治政治思想史関係の論文原稿を床中で書いていたうちに、終戦の八月十五日を迎えることができた。すでに助教授の北原春雄君は戦病死し、助手を罷免された岡田良夫君（京大大学教授）は遠くに去っていた。南山俊輔助教授は終戦直後その祖国の韓国に矢のように帰ってしまった。

（六）

昭和二十年九月になって、生き残った出陣学徒が帰学し、陸海軍の小尉中尉大尉少佐等であった旧職業軍人も新入学した。希望を失なっていた虚脱状態になっていた帰学学生諸君はこの大学でも、いわゆる「無能」教授排斥

運動を展開した。同志社では、学長を辞された黒川先生等々十数名の教授がその対象になった。再び学長を兼任した牧野総長も兼任排斥の対象になって兼任を辞められ、若松免三郎専任理事が臨時学長代行になったが、忽ち排斥される仕末であった。河原先生（国際法）・土井十二教授（刑法）等が辞任された。その前に、旧罷免教授若干（能勢克男・高橋貞三・和田洋一教授等々）の復帰が若松学長代行の手で進められた。そして学長新任の必要に迫られた当局は、田村先生、次いで佐々木惣一先生に交渉した。が何れも実現せず、結局私に白羽の矢が立てられた。私は躊躇したが、佐々木先生に相談したところ、引受ける！というところで、その決心をし、先ず教授排斥運動の学生諸君に排斥運動をやめるように説得した。「諸君は有能か」と聞き、「排斥が好きなら、私の排斥をやってほしい」「私は排斥はきらいだ」等々と言ったことが奏効して、排斥運動はびたりと止まった。私は四月から法経学部長と学長を兼任することになった。

二十一年度の入学式辞で、「無処罰方針の宣言」をしたことと、排斥の対象になっていた

た諸教授の一年完全有給休職をきめたことが、学長最初の仕事であったが、そのあとは大学再建の事に熱中した。戦争中学外にあった宗藤圭三教授・高田武四郎教授・助教教授の恒藤武二君等が復帰し、新しく矢野峯人・平石善司・伊藤規矩治・小松堅太郎教授等が赴任された。文学部長は美学の園頼三先生であった。牧野先生の総長辞任に代って米国亡命から帰国した湯浅前総長が就任されたので、学長兼任を然るべしと考えた私は、再建の途中で辞任し（二十二年七月）て研究生生活に帰った。そして、京都大学講師・大阪商大講師・関西学院大学講師・立命館大学講師等を次ぎ次ぎに兼ねるようになった。京都市公安委員・公安委員長になったのは昭和二十三年である。この間、京都大学教授に招聘されたが固辞し、また神戸大学教授に招聘されたが、もちろんことわった。

その後、湯浅総長が、基督教大学再建の責任者となって兼任学長を辞したあと、最初の公選で大塚節治博士が学長に就任され、湯浅博士は基督教大学建設のための渡米中に総長も辞任されて、大塚博士が総長も兼任されることになった。そして六十五才のとき兼任大

学長を退任された。その後任の公選で私は再び学長になった。昭和二十七年のことで、私の任務は大学再建のことと、大学院ドクターコースを設置することにあった。だけでなく私は大学自治の学風をつくることに腐心した。学外活動（学会活動・護憲運動・学術会議における私学国庫助成運動等）もした。そして健康で元氣な学生諸君と大いに切磋琢磨し、団交はもちろん、個人的にも喧嘩をした。ひどく喧嘩をした学生は今もなつかしい。とにかく学風振起して、同志社大学の名声はとみに挙げた。競争校の立命館大学の理事評議員諸君が挙って同志社大学の経営ぶりを研究にやってきたこともあった。東大教授等の中にも共鳴者があらわれた。なお、大塚総長・学長の時代（昭和二十五年）から私は理事になり、また評議員になったが、昭和二十九年と三十年を除いて、四十四年までそれがつづいた。

昭和二十九年三月末、私は家庭の事情のために学長退任の辞表を提出した。全学の殆んだの学生が署名し、またハリストをしたりなどして反対したが、私の辞意は固く、結局「学長は辞めるが、教授は辞めない」と約束

した。その約束に従って停年の七十才に到った次第である。また、その間、鈴木茂三郎・佐々木更三氏等に勧められても、また京大・立命館等の研究グループや文化人宗教家等の皆さんに勧められても、京都市長に立候補しなかつたのである。他大学からの誘いにも、乗らなかつた。徳富蘇峯先生南原繁先生及び大沢善夫君の励ましを忘れることができない。

ところで、後任の選挙で大下君が当選し、私を押し下ろした学生と一部教授の意思はとおらなかつた。大学運営の姿勢は漸時変わって、入学志願者数においても数年前から立命館大学に首位を譲るまでになつてしまつた。しかし私自身は、学生生活に帰ることができ、それ以後の余生で、『憲法学原論』の完成を始めとして、拙著が毎年一冊ぐらいは刊行されるようになった。

(七)

すなわち『憲法改正論』『違憲・合憲の法理』『政治概念論』『判例憲法学』（編）『政治学』『加藤弘之』『討論日本国憲法』（編）『日本国憲法条義』『政暴法』（共編）『憲法

重要問題の研究』『憲法判例綜合研究』（編）『佐々木博士の憲法学』『児島惟謙』『憲法と抵抗権』『憲法学講義』『憲法と平和主義』『憲法九条の理想と現実』（編）『現代大学論』『議会と革命』『政治学研究』等々が二十九年七月以降の出版である。

先日数えて見たら、編著共著も入れて全部で五十冊近くあることを知った。論文や雑文も年中風邪と同居し十指に余る疾病と斗ってきた羸弱の私としては、案外に沢山書いたものである。おかげで、非常につきあいのわるい人間になっていたと思う。

憲法・政治学研究会をつくったのは昭和三十三年であり、すでに今日までに一三六回の研究会をもった。二月十二日の新島先生生誕記念会を開催したり、憲法大学講座を開催したりなどもした。そうして、この研究会と表裏一体の憲法研究所を開設したのは、昭和三十三年であった。これは本年（昭和四十七年）で十年になる。論文集六冊（『最高裁判所の研究』『平和思想史』『革命と平和革命』『戦争と各国憲法』『抵抗権』『永世中立をめぐる諸問題』）を出したり、月刊の機関誌「永世中立」も、この二月で六十五号になった。校

祖新島先生や恩師高木先生の遺志を体して同志社出の政治家を出したいという念願もすこしく叶って、東中光雄君（学長の山本浩三君及び教授の高橋悠君等と同級）と土井たか子さん（教授の西尾昭君及び島田敬介君等と同級）が衆議院議員になった。また研究所の研究グループから黒田了一君が大阪府知事になった。これらのことも憲法研究所の一成果と言えよう。その間、護憲連合・憲法問題研究会・憲法会議・国際連絡法律家協会等にも関係をもつようになった。そして、印度にもヨーロッパにも中国にも行った。然しすべてが母校同志社のおかげでないものはない。

去る二月から同志社の現役を去って名誉教授になったのだが、残務（答案の採点等）のために十分の解放感がない。またこの四月からは、毎日新聞京都支局ホールで、憲法十回講義をすることになっているので、残務が済んだらその準備をするつもりである。大西良慶先生・住谷悦治先生・末川博先生・毛利与一博士等の十氏が、今年度の講座に協力下さることになっている。

五月には、憲法研究所十周年記念論文集として、私の編集で、『憲法改正と法律改正』

が評論社から出版されることになっている。また、すこしくおくれて、岡倉古志郎君編集の『平和と人権』が、私の古稀記念論文集として日本評論社から出版されることになっている。岡田良夫君編集の同趣旨の論文集も、これはミネルヴァ書房から出版される由である。それらに先き立って、三月下旬には、拙著『近代日本の平和思想史Ⅱ明治・大正・昭和の平和思想家群像』が、ミネルヴァ書房から出版されるので、残務の傍ら、目下その校正に時間を取られている。更に、『政治学原論』『比較憲法制度論』等も書きたいと思っている。「私学国庫完全助成」（従って国公立大学の低額学費制）と「永世中立」の実現のためにもこれまで以上に尽したい。残生をそのように生きたいと思っている。

昔の中国の詩人は「人生意気に感ず」「功名誰か復た論ぜん」と言った。私は、新島先生と高木先生と佐々木先生に賞めていただきただけである。

（元・大学法学部教授・大学長・同志社理事、同志社大学名誉教授）

アイスホッケー部の思い出

— 忘れえぬひとびと —

瀧川 春雄



(筆 者)

々の思い出を語り合っていると時間の経つのも忘れる程であった。

千達四郎さん（これからは単に千さんと呼ぶことにする）は同志社中学から同志社大学予科へ進まれ、大学（経済学科）をたしか昭和一六年一二月に卒業されて、すぐ陸軍に入られた。そして、昭和二〇年八月に北支で散華してしまわれた。

昨年八月二二日に、われわれアイスホッケー部の後輩が中心になって、故千達四郎先輩の追善法要を千家の菩提寺である大徳寺の聚光院で行った。当日は戦前のメモバー二〇名余りの者が集まり、表千家からも多数おいでただいてお茶まで立てて下さり、意義深い一日を過ごせたことは後輩として何よりのよるこびであった。思い出のアルバムを前に数

千さんは在学中アイスホッケー部のマネージャーとして精根をかたむけ、千さんの学生生活の大部分はアイスホッケー部の活動と共にあった。試合や練習のスケジュール、合宿のプランから各部員のコンディションに至るまで、千さんは一人で気を配っておられた。そして多くの部員の面倒をみ、特に満洲、朝

鮮、関東州から出てきている若い部員の下宿の面倒、腹ごしらえ（あの頃は皆若かったのが豚のようによく食べたが、戦争で次第に物資が窮屈になってきたときも大勢の部員を自宅へ連れて帰って、たらふく御飯を食べさせていただいたものであった）から小遣い銭の心配までされたものであった。いいマネージャーは沢山いるが、千さんの後にも先にも彼のような名マネージャーとしての資質を物心両面にわたって備えていた人は少なかったと思う。当時のアイスホッケー部があれだけ活躍でき、あれだけの戦績をおさめえた功績の大きな部分は、千さんに帰せられるべきであると思う。

私は京都一中時代に千さんの弟の健六郎君（われわれはセンケンと呼んでいた）と同級で仲がよかった。お互いに中学時代も、中学卒業後も、いいにつけ悪いにつけ行動を共にしたが、センケンもビルマ戦線で散ってしまつた。千さんは弟の友人という気易さからか、私には特に言いたいことを言われたし、よく怒鳴られた。しかし、黒い顔を紅潮させて大きな眼をギョロギョロさせながら怒鳴る千さんと、二人切りで静かに話すときの千さ

んは別人のように物静かでやさしかった。そして感激家で涙もろかった。いつかの試合で僅かの点差で負けたことがあった。私にとっても負けたことは残念だったが、客観的にみれば相手が強かったのだし、味方には多分にラッキーな点多かったので、負けるべくして負けたと思って私は試合後平気でタバコを喫っていた。このときもポロポロ涙を流しながら顔を真赤にした千さんから、「お前は負けて口惜しくないのか」と一カツくわされた。このときも、この人はアイスホッケーに全身全霊を打ち込んでいるのだと、私はしみじみ思った次第であった。

ふさふさした頭髮をいつもきちんと手入れをして、端正な服装に身を包んだ千さんはなかなかダンディであったから、二、三ヶ月散髪をしなかったり、いつも草履をつっかけていた私は、「汚い。お前もう少しましな恰好がでせんか」とよく叱られた。弟のセンチンから私のアダ名をきかれたのだから、千さんは一度も私の名前を呼んでくれず、最後までアダ名で押し通してしまわれた。私は「おじい」とか「ボーフラ」と呼ばれていた。若いときは痩せていてヒョロッとしていたから

「ボーフラ」と呼ばれたのだと思うし、私は浪人を三年していたので「おじい」と呼ばれたのだと思う（「おじい」について、実はもう一つ心あたりがあるが、これは今言わないことにする）。千さんが私を呼ぶのはいつも「おじい」であり、私もこのアダ名で用を足していた。

千さんが名実ともに名マネージャーであったのは、千さんが恵まれた家庭の御曹子であったからだけではなく、千さんの持つ人間性、つまり几帳面で、心暖かく、親切で、感動家で、そして思い切りの早いさっぱりした人が兼ね備わっていたためであったと思う。

千さんの法要で懐しい昔の面々の顔を見て、三〇年前のことが走馬燈のように懐しく私の脳裏によみがえってきた。練習のこと、松原湖の合宿のこと、試合のこと、懐しい部員の面々のこと、すべて思い出は千さんにながっている。

「おじい、また遅れたな。皆があがってから五〇回廻れ」。通常のスケートティングの練習は当時河原町三条の京都スケートリンク（京劇のあったところ）で午後三時半から行われた。私は授業が終って雑用を済ませてか

らかけつけるのだが、よく遅刻した。大体四時半過ぎには皆練習を終えてあがってしまうが、遅れた者はそれから更にスケート場を五〇周させられる。真中でホイッスルを手にした千さんが仁王立ちになって監視しているのでスピードを落して力を抜くことができない。今でも千さんのカン高い声が耳の底にこびりついている。

× × ×

あの頃（といっても私は昭和一四年以降しか知らない）のアイスホッケー部は強かった。それだけに練習もきつかった。私が同級の水沼敏安などにそそのかされてゴールキーパーの練習をはじめたのは昭和一四年の九月頃であったと思う。この頃から私のキーパーとしての難行苦行がはじまる。

フォワード(FW)やディフェンス(DF)

は、シュートの練習やマンツーマンの練習とかフォーメーションの練習では自分の出番でないときは息が抜ける。しかしゴールキーパー(GK)ははじめから終りまで一人で全部の標的にならねばならない。というのは第一キーパーの小野さんが余り練習に出てこなかったので、交替してもらう人がなく、いき

おい私がシュートの標的になることが多かった。その頃はつらかったが、今から考えると、よくあれだけみっちり練習をさせてもらったと感謝の気持ちさえする。

その頃のことである。何かの都合でどうしても私が練習に出られなかったとき、もちろんと言っては怒られるが、小野さんも出てこなかった。やむなくマネージャーの千さんが、いつもわれわれが着用するプロテクターやレガードに身を包んでゴールの前に立たれたことがあった。

GKはシュートされるときに腰を落として両足を揃え、両腕(片腕にはスティックをもつが——私の場合は右手にスティックをもっていた——)を心もち開いて下に垂らしてかまえる。上体をなるべく立てていないと相手につけ込まれる。両足を揃えるのは両足の間を早いライナーのシュートで抜かれなかったためである。もし両足を開いてかまえるなら、スティックをもっていない方の手を両足の間に置いてかまえないければならない。私などは、こんな器用なことをするよりも両足を揃えている方が簡単だから、いつもセオリー通り両足を揃えてかまえる努力をしていた。ところ

が慣れるまでは、攻撃されるたびに腰を落として、パックの動きに応じて足の位置を変え、身体を左右に動かすのは相当きついものであり、気をつけていないとすぐ両足が開いてしまう。従って、つい腰が高くなってしまい、開いた両足の間や腰から下をビュンビュンシュートされる。

千さんも腰が高く両足が開いていたのか、股ぐらへホップしてくるシュートをまともにくらってしまつたらしい。その場に昏倒されたということだが、あとで千さんから「お前が出てこないでひどい目に遭つた」と顔をしかめて何へんも文句を言われたところを見ると、どうも急所へシュートをくらわれたらしい。普通GKはめつたにこういうことがないのだが、臨時に身代りGKをされたために痛い目に遭われたので、今でも気の毒なことをしたと思つている。

GKは練習のときつらい代りに、あの当時のように強いチームのGKは試合になると楽しい。「ゴールキーパーは練習で泣いて、試合で笑え」という言葉があるが、私の場合は全くその通りであった。試合では、強力なFWやDFがリング狭しと頑張るから、味方

の得点は増え、時たまにしか相手からまともなシュートは受けない。まるで特等席で観戦しているようなものである。

インターカレッジでは相当強い相手がいながら敗退することも幾たびかあったが、関西ではわれわれは勝つのが当たり前になっていたし、私も試合をすれば勝つものと思つていた。京大は比較的強かったが、関西学院や神戸商大(現在の神戸大学)は全く楽な相手であったし、京大以外は私のような頼りないGKでもまず心配はなかった。

× × ×

この頃のアイスホッケー部には印象深い選手が多かった。

キャプテンは飯塚雄次さんであった。われわれはこの人を「親方」と呼んでいた。親方は大連二中出身のFWのセンターで、スティックワークといい、スピードといい、かけひきといい、全く当時の超一級品といつてもこんなにもうまい選手がいるのかと私はいつもあっけにとられて眺めていた。うまいというより何か芸術品をみているようであった。あの当時に全日本学生選抜軍を編成していたら、彼はまっ先に選ばれていたことである

う。相手のFWを自分にひきつけておいて巧みにその間を抜いて、全く神出鬼没の動きをしていたので、この人はよくノーマークで相手ゴールに殺倒していた。そしていつも相手ゴール付近のGKの一番いやな位置で味方のバックを待っていた。従って得点能力は抜群であったし、防禦能力も群を抜いていた。

親方はハンサムな温厚な紳士で、めったに怒らなかつたが、彼が怒ったときは本当にこわかつた。技術抜群で人間がしつかりしているから、こういう人を理想的なキャプテンというのであろう。私は親方と千さんのお伴をして連盟のスケデュール会議などに時折出かけたことがあつたし、たしか昭和一五年一月のインターカレッジの終つたとき親方にひっぱられて銀座を飲み歩いたりしたので、この人の温い人間性が今も胸にしみている。昭和一五年の秋からのシーズンは胸をおかされて大分弱っておられたが、それでも口に白いマスクをかけて、余り疲れないうちに交替しながらプレーをしておられた。弱っておられたといつても、この人がFWに入ると全軍がひきしまつて得点がぐんと増えるからえらいものであつた。このようにチームの信頼を一

身に集めてプレーするのが本当のキャプテンである。しかし、やはり無理がたたつたのか病気が悪化して、昭和一六年に亡くなられた。われわれは京都のお宅へお悔みにいったが、大連の実家での葬儀には松尾正和(雪印乳業)が丁度大連へ帰省していたときで、部員代表として参列し、当時のスケート部長今井仙一教授の弔辞を読んだのであつた。

FWの津田源吉さんも異色の選手であつた。内地出身(ということは、小さいときからスケートをやっていないで)でこれだけうまくなつた人も珍らしかつた。

DFの荒川秋幸さんも津田さん同様異色の選手であつた。

DFの鷺野さん、FWの長藤さんもスマートでうまい選手であつた。鷺野さんはなかなか実戦向きで、かざかずのプレーが印象に残っているが、長藤さんは不思議な人であつた。というのは、彼はスケートティングはうまいし、スティックさばきもうまく、体躯にも恵まれていたから、練習のときは素晴らしい力を発揮した。ところがどういふものか実戦になると、まるで実力の一〇分の一も発揮できない人であつた。気が弱かつたのだろうか、

本当に惜しい人であつた。ブルペンエースという印象が強く私に残っている。この二人の人も戦争中に亡くなつた。

DF、あとでFWの斎藤宣夫さんは奉天一中の出身である。大きな身体、大きな顔、太いまゆ、ポパイに出てくるブルートそっくりということで、彼はブルちゃんという愛称で呼ばれていた。いったんバックを持つとめつたなことで相手にとられないという、まるでスティックにバックを貼りつけたようにドッキングしながら敵陣を抜けてゆくさまは美事であつた。小さいときからスケートをやっている人は、スケートをつけてもつけなくとも余り変らないのか、彼はまるで「つつかけ」を履いているような調子でスケートをつけて氷の上をかけ廻っていた。スケートのひもを全然締めずにスコンとスケートを履いてプレーしているブルちゃんをみて、私はつくづく羨しいと思つた。ねばつこい点では天下一品で、スピード感も余りみられなかつたが、執拗なプレーで重量感のあふれていたことは随一であつた。彼のボディチェックでフツ飛ばされた相手チームの選手は数が知れない。

練習のとき、ゴール前の混戦でいつの間に

かバックをとったブルちゃんがニカワで貼りつけたようにスティックにバックをくっつけて攻め込んでくると、すぐゴールのうしろを廻ってゴールの側面に出て、ゴールと私のスケートの外側のすき間からシュッとバックをゴールに放り込むことがよくあった。ブルちゃんがかんなこまかい芸当をやるので驚ろいたが、私がゴールの両サイドのすき間からバックを叩き込まれないようになったのは、ブルちゃんの訓練のおかげであった。

戦時中軍需会社にいたブルちゃんは、当時海軍省にいた私をよく東京に訪ねてくれ、泊ってゆかれたこともしばしばであった。今もブルちゃんとはよく会って、杯を傾けながら昔話を花を咲かせている。

GKの小野さんは背の低いズングリした選手であった。朝鮮の大邸中学の出身であったと思う。ゴールの前を早いスピードで右に左に守備位置をかえ、低い重心でかまえているこの人を見ると、うまいGKだなあといつも私は嘆息して眺めたものであった。彼の練習をみていると、まるでアクロバットさながらに小肥りの身体の重心を下げて、前後左右に小さく、凄く早く身体を移動させ、そのくせ

上体はいつも安定した状態を保っているのがある。私もよく真似をして同じようなことを繰り返してやってみたが、第一スピードに身体がうまく動かないし、無理をすると直ちに身体のバランスが狂う。これは所詮基本的な足（スケートティング）の鍛え方の差に帰着するものであるから、私は私なりの戦法を自分であみ出すことにして、以後私は迂ることにのみ専心した。人間は創造的でないといけなのであって、いかに人の模倣をうまくやっても、それは所詮猿真似にすぎない。

彼は近接戦ではめっぽう強かったが、遠方からの何でもないシュート（ロングシュート）を時折ゴールに放り込まれている。それで彼はGKとして上半身に弱点があるといわれていたが、これは彼の強度の近視のせいであるうと今でも思っている。

DFの水沼敏安は新京中学から入ってきて、一年生のホヤホヤのときからレギュラーで活躍していた。小柄なくせにまことに強靱な身体の持主で、プレー中のスピードは彼が一番速かったと思う。ポーカーフェイスでもブッキラ棒な怒ったような面構えをして試合をしていた。この小柄な彼が相手テー

ムの巨漢を片っ端からボディチェックでフツ飛ばすのであるから（彼は腰が安定していて、腰が非常に強靱なせいだと思ふ）、味方からみればこんな痛快な場面はないし、相手や相手の応援団からみれば、こんな小憎らしい選手はなかったと思う（彼にフツ飛ばされて、しばらく足腰の立たなかつた選手もいた）。こういう選手がいてはじめて試合をみていて面白くなるのであるから、彼のような選手を本当のスタープレーヤーというのであろう。

水沼は試合後、千さんや親方からプレーについて叱られると、口惜しがってよく頭を刺ってきた。それでいつとはなしに彼のことを皆が「坊主」と呼ぶようになった。坊主は京都の叔父さんの家に寄宿していたので、自分が街で酒を飲んで遅く帰ったときはいつも私の家に来て食事をして酒を飲んだことにしていたらしい。彼の叔母さんから私に電話がかかってきたときに、時折丁寧なお礼を言われてびっくりしたことがあった。（彼も時折私の家へやってきたが、一回くると五回分くらいダシに使っていたようである）
当時の神戸の聚楽館のスケート場は四隅が

真四角の九〇度の角型になっておらず、まるくなっていたので、相手が攻め込んできてバックを隅っこへ叩きつけてクッションを利用すると、バックは丁度ゴール前にはね返る。

はね返ったバックを相手がゴールめがけてシュートしてくる。全くGK泣かせのスケート場であった。特に関西学院との定期戦のときなど前半にフィギュアの試合があるから、どうしても氷面が荒れて少々デコボコする。ゴール前のデコボコしたところへスライドしてくるバックを、簡単にスティックではねのけようとすると、時折バックがスティックの上をおどり越えてゴール内に転り込みそうになり、かろうじてグロブで上からおさえることがある(どんな場合でもGKは慎重にバックをとめるべきだが、スティックではねとばすことは通常よくやることである)。こんなときにはDFで守っている坊主が血相かえて私の前へもどってきて「お前ヒヤヒヤさせるな。しっかりとめんか。明日のひるめしはお前だぞ」といながら自分の守備位置にもどってゆく。ところが、時たま私の前方で防禦線を敷いている坊主と松尾が、いとも簡単に相手の攻撃軍に突破されて、相手が私の方へ

殺倒してくることもある。そんなときに坊主は苦笑しながら私の方へもどってくる。こういうときに私も「お前あんな抜かれ方して何か。明日のひるめしはお前だぞ」とやり返したものであった。「明日のひるめし」というのは罰金として明日のひるめしをおごれということ、こういう場合大抵長崎屋の七〇銭のスパゲッティを意味していた。大学の学生会館のキツネどんぶりが一五銭であったし、烏丸今出川の西北の角にあった「山下食堂」は御飯が食い放題でひるめしは二五銭であったから七〇銭のスパゲッティをおごるということは相当な豪遊に属していた。試合中の一瞬間にこんな会話をかわし、お互いにプレーを楽しめたのは全くよき時代であったと思う。坊主は今も福徳相互銀行のアイスホッケー部の総監督をしており、スケートとの縁をつないでいる。

FWの本田康二も水沼坊主と一緒に一年生のはじめからレギュラーとして活躍していた大連中学出身の選手であった。身体も大きかったが、スピードもあり、何よりも腕力が強かった。練習のときに、間近から彼の強いシュートを受けるのが、私にとって苦痛の種で

あった程そのシュートは強くスピードがあった。私の右手の甲は彼のシュートのために一面に小さな血豆でおおわれることがよくあった。私のかむっていたマスクの左眼のところは少し内側にひん曲っていたが、これもゴール前の混戦から彼のシュートがうなりを生じて飛んできて、直接顔面のマスクにあたったときの名残りである。このとき私のかけている眼鏡の左のレンズに無数のひびが入った。

身体を立てたままあれだけ強く速いシュートができるのは尋常な腕力ではない。近頃のシュートはゴルフのボールを打つようなハタキ込みが多いが、GKとして恐ろしいのはスティックにバックをすいつけたまま矢のようなシュートがスライドして襲ってくる場合である。彼のシュートはこわかった。彼のプレーは荒っぽく、派手に動き廻るから随分よく得点もしたし、こういう彼にしばれた若い女性ファンが大勢いたのは不思議ではなかった。水沼にも女性ファンがいただろうと思うが、性格的にも気持のこまかさからいっても(水沼は顔に似合わず気持のこまやかな、やさしい性格であった)彼は水沼とは対照的な選手であった。

D Fの松尾正和は大連一中から私より一年あとに入学してきた選手であった(彼は一見紳士風なので残念ながらニックネームがつかず、通常皆は彼のことを「松あん」と呼んでいたようである)。昭和一五年の秋のシーズンの試合前、ユニフォームを着たまま私が夕食をパクパク食べているのをみた彼が、「落付いてよくそんなにメシが食べられますね。僕はノドに通りません」と青い顔をして私に言ったことがあった。初出場を前にした彼が、野放図な私をみて驚いたらしい。しかし、私としてはじめて試合に出た一年前には、試合が始まるまでに何べんトイレとの間を往復したか知れなかった。トイレに用事があるわけではないが、ゆかねば落付かず、行ったところでどうということはないが、武者ぶるいでもいうのである。松尾も初出場の頃はこれ程純情な男であった。その松尾が次第に実戦で鍛えられてくると、別人のようにたくましい選手に成長した。戦後大病をして、今の彼は痩せているが、当時の彼は一九貫以上の体重を有する大型のD Fであった。従って、水沼と彼の組む防禦線は本当に力強く、彼にボデーチェックをくわされてフツ飛んだ相手方の

選手も数知れない。試合後二、三日左肩が上らぬくらい、彼は猛烈に体当りをやっていた。彼は冷静な人間で、何事につけても慎重で、実に理論的な選手であったから、彼には頭腦的なプレーが多かった。私がG Kに入る試合では、水沼と彼は全身青アザだらけになった、と今でも酒のさかんにして二人がこぼすことがある。ゴールを私が守ると信用できないから、自分達二人もG Kのつもりで相手のシュートを身体中で受けとめていたというのである(G Kは重裝備をつけているが、F WやD Fは大した防護をしていないから、パックが身体にあたると青アザができる)。この二人の主張はある程度本当であるが、全部信用するわけにはゆかない。私も彼等二人に時折「貸し」があるからである。

試合中水沼と松尾は私の守るゴールを心配して、私の前をよくウロチョロした。余りD Fがゴール前をウロチョロすると見通しが悪くなる。それで「坊主どけ、もう少し右へよれ」「松尾、見にくい」と私が絶叫しても、彼等は自分達のとった位置からなかなか退いてくれないことがあったのは事実であるが、関学との試合で、水沼と松尾が珍らしく

関学のK選手(K選手は足が速かった)にディフェンスラインを突破されたことがあった。

防禦線を突破されたことは彼等D Fの全責任である(これはむしろ彼等二人の強力な防禦線を突破したK選手の力量と覇気をほめるべきであろう)。このときのことをKさんが水沼と松尾に後で次のように述べられたそうである。Kさんはディフェンスラインを抜いてノーマークになったので「しめた、一点とれた」と思って、ゴールに向って突進し、二、三回ドッジングをして私をゴール前へつり出して、その隙をねらってシュートするつもりでいたところ、私がゴール前へつり出されるのでそのまま力一杯シュートしたが、パックは私の胸ではね返されてしまった、というのである。そして「あのキーパーはつり出そうとしても動きませんね」と残念そうにいわれたということであった。ところが、これに對して水沼と松尾は「Kさん、あいつは動かないのでなくて、動けないのですよ」と大笑いをしたという。「本当のことをハッキリ言いやがる」と、この話を後で聞いて私も大笑いをした。

Kさんが水沼、松尾を抜いてノーマークに

なったとき、関学ファンをはじめ場内が大歓声につつまれ、私も一瞬「どうすべきか」と思ったのは事実である。しかし次の瞬間「じっと守っていればいいのではないか、相手のシュートが必ず私の盲点にくるとはかぎらない」と思って、じっとシュートを待っていたら、その通りになったまでのことである。私には私なりのアイスホッケーに対する哲学があった。アイスホッケーは味方六名で試合をしているから、G Kが得点されてもそれは六分の一の責任を負うにすぎないというわけである(得点されるとG Kが全責任を負ったような姿でしおれているのを見るにつけ、私は何かコッケイな気がしていた)。私はこのことをいつも水沼や松尾に主張していた。このように考えて試合をしていると、非常にのびのびやれる。戦後アメリカからやってきたメッツというチームのG Kが「キーパーの責任は六分の一である」と言ったのを何かで読んで、私が三〇年前に考えていたことと同じことを言うG Kがいて大いに意を強くした次第であった。

うまいG Kほどよく動く。しかし余り動くに必ず弱点が出てつけ込まれる。不必要に動

かないで守るのが、得点を最少限度ににくいとめられる要点だと私は今も思っている。G KはDFに自分の盲点、弱点を守ってもらわなければならぬ。従って混戦になってくると、自分が得点されないために一番都合のいい位置にDFを配置するよう指示すべきである。G Kからみて相手が右前方から攻めてくれば、必ずといっていい程ゴール中央から左方、特に左の肩口をねらわれる。左前方から攻められるときはこの逆になる。こんなときに殆んどねらわれないところにG Kは神経をくばる必要はない。要するに、一番受けとめ難いところへシュートされないように守ってもらうための位置にDFがいてくれなくてはG Kは苦戦する。私のような頼りないG Kが生涯無失点記録を維持できたのは、強力なFWの力もさることながら、私の多くの弱点を知りつくしていた優れたDF水沼と松尾が、ねにいい位置で私を助けてくれたおかげ(試合中主観的には私が不満に思った位置も、客観的には二人がいい位置にいてくれたのだと今では感謝している)に負うところが殆んどすべてであったと思う。そして、それはDFとG Kとの完全な意志の疎通による産物であ

ったと、私は今もこの二人に感謝している。FWを生かすのはDFであると同様、G Kを生かすも殺すも一にDFにかかっていることを知るべきである。

そして、私の体験からもう一つえたことは、G Kに求められるのは早い決断だということである。決断してすぐに行動に移すことである。私のその後の生活(海軍での生活、長い大学の研究室での生活)において、このことは非常に有意義な訓練として私をずっと支配した。

昭和一五年一月のインターカレッジのとき、前スケータ部長の林信雄先生(現横浜市大教授)が、われわれ部員一同を新橋の第一ホテルのグリルで御招待下さり、凄く御馳走になつてみても懐しい思い出である。私自身が大学教授になつてみて、当時林先生がわれわれ食べ盛り部員に相当無理をして御馳走して下さつたのだからと思つて、今も涙の出る程うれしい思い出をして下さつたものと感謝している。

まだ思い出に残る人達は随分多い。森清さん、満州出身の矢口、近藤、仲矢、田中敬一郎、田中(考)、マネージャーの西村太一の諸君のこと、松原湖の合宿の泣き笑いなど、思い出は尽きないが、これはまた別の機会に改めて書きたいと思う。

× × ×

先日、日本リーグの福徳相互銀行と岩倉組

の試合をみにゆき、久々にアイスホッケーの試合をみた。美しい氷面、スケートのエッジが氷面を切るさわやかな音、やはりアイスホッケーはいいなあという実感が私にしみじみ沸いたことは事実であるが、反面少し物足りない、意外な感じも受けた。

私は専門家ではないからアイスホッケーの詳しいことは分らない。しかし昔の試合と今の試合を見比べると、昔の方がずっと面白かった。ということは、昔の方がもっとスピードであったと考えられるからである。アイスホッケーの規約には「パックはつねに運ばれていなければならない」という意味の条項がある筈である。しかし現実の試合ではそうではない。ピンチでもないのにフェンス際で、スケートでパックをとめてしまっている場面にはしばしばぶつかると。メモバーチェンジのためにアイシングがしばしば逆用されてみたり、故意のオフサイドが目につきすぎる。これでは全く面白くなく、鼻白らむ思いがする。作戦は大切だろうが、競技そのものの興味を減じたり、スピードに試合が進まぬような作戦はマイナスであり墮落だと思ふ。時間かせぎをやる野球試合のカケヒ程観衆を

愚弄するものはないのと同様（こんなカケヒキをしなければいけないような事情にもち込むのは監督の頭が悪いからだと思ふ）、アイスホッケーをもっと興味あるものにするには、スピードな試合運びに専心意を用うべきだと考える。実際にプレーをやってみれば、選手がいかにきついかということとはよく分る。しかしプレーヤーはいかにきつくとも、ゲームは連続してはじめて興味もり上る（五人セットでメモバーをチェンジするところがいいかどうかは別として）。そのうえ近頃はGK以外のプレーヤーの防具が重装備になったためか（このため余計にスピードがにぶっている）、自分でパックをGKなみに身体で受けとめてみたり、無暗やたらにボディチェックをする場面が多い。これではまるで格闘競技である。昔のような程度のプレーヤーの簡単な防具で、なお敢て勇敢に体当りをやる選手がいるときに、「凄いい！」という手に汗にぎる魅力があるが、猫も杓子も重装備に身をかためて体当りばかりをやっているのでは、まるでそのそしていて面白味を感じられなくなってしまう。アイスホッケーの魅力はスピードにある。

アイスホッケーの試合にもっとスピードをとりもどしてほしい。（現在の規約自体にも問題がある。アイシングのようなものがなくなるとか、私は疑問をもっている。）素朴ではあったけれど、昔のアイスホッケーの方がスピードで面白かったと、あの頃のとが一層懐しく感ぜられた次第であった。

× × ×

試合をする以上勝たねばならない。それには基本的な練習が大切であるが、練習はつらい。私にとっても練習はつらかったが、私は運動選手の生活をして本当によかったと思っている。私のアイスホッケー部の生活は本当に楽しかったし、私は私なりにいろいろな体験をし、いろいろなものをえた。そして、心おきなく何でも相談できるよき友をえた。

若い先輩の部員諸君も、スケート部の生活を通じていろいろな体験をつんで、後でふり返ってみて、あの頃は懐しく、楽しく、意義があったと、自分で満足のゆくような生き生きとした生活を送ってほしい。これは、どの運動部の選手諸君にも言いたいことである。

（昭和一八年法学部卒業、前大阪大学教授、現大阪高裁判事）

再び白墨を手にして

高橋 勘



○ 「人間は自己の目的のために事物を变革してゆく。その变革の過程において、事物間の必然的連関を次第に明らかにしてゆく。事物間の必然的連関はその一側面として、量的連関を含むと同時に、その量的連関自体の間の必然的連関も明らかにあってゆく。従って量的連関だけを抽象された形で科学的対称とすることが、可能になってきた。この量的連関についての科学が、数学である。」と私はかつて学生時代に敬愛する数学教授から教わっ

た。本日より私は校長をやめて教壇に立ち、今のべました数学を諸君と共に学び且つ教えます。八年間、何も教えなかったブランクは、一挙に埋まるものではなく、ずい分と誤った、また下手な授業になるかもしれないませんが、よろしく願います。

さて、教育という場における運動は、教えることと、学ぶことにあると思います。教えるとは、互に希望を語ることであり、学ぶとは、共に真実を胸に刻むことであると考えます。このことは校長であろうとなかろうと、

諸君と先生との間に交流する基本的な考え方であると確信しています。だから今日からの私と、昨日までの私は何らの変りはないと思います。それにしましても足かけ十年、ずい分と長い間校長をしたものだと思います。その離任式の挨拶ですから、大過なく過し得ましたことは全く皆々様のお力添えでありまして云々と、申しのべるのが当然でございませう。がしかし、私にはとうていそれがいえません。大過なくどころか、大過、小過、こもども入り乱れてずい分とご迷惑をおかけいたしましたから、心よりお詫び申しあげます。何卒、ご寛容下さい。

○ 後任の浦野新校長には大変ご迷惑なことながら、私の仕事の跡始末、ごみさらえさえていただくことになって誠に申しわけなく思います。何卒、健康にだけは十二分注意して下さいますようにお祈り申しあげて、離任式の挨拶といたします。

○ 以上は去る四月九日、私の校長離任式の挨拶であります。

そして、しどろもどろだった八年間の校長生活を離れて、私は猛然と数学を教え始めま

した。全くの猪突猛進であります。かつて私は、本誌第三号（一九六三年四月発行）に、「暫し白墨と別れる」という一文を書きました。すなわち、一、良き先生は生徒のために生命をすてる。ができそうもないこと。二、貫禄のないこと。三、おめでたい校長であること。ところがこの公約（？）すらかななむつかしいことで、生徒のために死をいとわぬ校長になりたがり、貫禄もないのに時々だもしもしたり、おめでたいといわれると怒ったり、いやはやさんざんであります。再び白墨を手にしてやがて一年も過ぎようとしています。こんな教師に習った現一年生こそ迷惑至極のことだろうと思ひ、先般私の授業についての批判なり、注文を書いてもらったら、書くわ書くわ色々と考えさせられるものがありました。最もかっこうよかつたものは、「先生が校長であつた間、同志社高校に入った生徒は不幸であつたと思ひます」でした。これは私が校長時代の同志社高校は不幸であつたのか、あるいは校長であつたがために数学を習う機会がなくて不幸だったのか、多分後者だろうと思つて鼻を高くしていい次第であります。

○先生はタッタッタツと書いてゆく。ぼくらはトコトコと追いかけて書く。タッタッタツと書いたあと、サツと消す。ぼくらはアツと叫ぶ。すがる声を尻目に、又もタッタッタツと書いてゆく。だからぼくらは一生懸命、急いで急いでうつしてゆく。内職などする暇はない。やつと人心地がついたら、「おい紙くずを拾い給え」、捨ててくると又タッタッタツと書いている。頭にくるが写さずにおくとわからなくなる。その内突然先輩の話始める。皆なドツと笑う。急に我にかえてタッタッタツと書き始める。又トコトコと追いかける。ぼくらのうすい頭に、先生の濃い頭をしぼりだしつめこんでゆく。みなちよつとばかり賢くなつた気になる。進め、勘ちゃん!!先生は又タッタッタツと書いてゆく。

○「同志社高校へ今年から進学します」とピアノの先生にいったら、「まあ!! そしたらカンチャンがいるわよ。いい先生よ。面白いわよ。楽しいわよ。あそこの学校はいいわよ。まわりはたんばばかりなのよ。」とおっしゃつたけれども、私にはカンチャンっていう人物がどんな人かわからなかつたので、

「はあ」とつまらぬ返事をした。たぶん若い面白い顔の先生だろうと思つていた。しばらくして今年岩倉を卒業したいとこに聞いたら、「あつ、校長先生やわ、その人。」とのことでびっくりし、変な学校や校長先生をチヤンづけよぶななんてと思つた。さて、いよいよ学校に通いだすとみごとその先生が数学の担当になっていた。数学というと、中学三年の時えげつない点をつけられてから、数学を三十分みていると頭が痛くなり、たまに数学の勉強をするとすぐ疲れて、翌朝なかなか起きられなかつたし、昨年の担任だった数学の先生がたまらくやあな先生だった。そんないろいろな条件が重なつて数学の時間前には必ず、早弁、することにしていた。で、しようもない気持ちで岩倉にいったら、チヨ一ネクタイをしたその先生が、教室を走りまわり、「あほうである」とか、「悪い奴だ」とか「机がゆがんだる」、「ごみを拾え」などといわれているうちに段々と数学が嫌いになつたやうです。

○十年前、私の幼稚園の同級生の間で、「カンケリ」がはりました。みかん、もも、などのカン詰の空カン庭のまん中にお

いて、「ドン」で走って行ってカンを蹴りました。何回かやったあとカンが一回も蹴れなかった子をなじりました。私はいじめられるよりいじめる方が好きで、懸命にカンを追ったことを覚えています。「わあーカンカンカーン」とわめき散らし走って行って、おもいきり友達と一緒にかんを蹴りました。だから今でも「カン」ときくと、カンを蹴ることを思い出します。私は数学が嫌いです。それでも「カン」は好きです。勸先生の名前が好きなんですよ。先生を見ていると走って行って蹴り飛ばしたくなります。それだからほんまに頑張って勉強して数学が好きにならなありません、と思います。

○ローマの市民よ。同胞諸君よ。恐れなくともよい。逃げなくともよい。高橋勸も又我々同様な人間である。(シェイクスピア「ジュリアス・シーザー」より)

はじめはほとんど絶望し。たえられまいと思つたに。どうやらしのでこられたが。問うてくれるなそのわけは。(ハイネ詩集「小曲」より)

ところで、私は本誌三号の「暫し白墨と別れる」の記の最後に、「来る四月より私の手

の平はチョークで荒れぬ手となる。一年過ぎでじつと私の手の平を見て、私は何と思うことだろう」と結んだが、生徒の一人は次のように書いています。

○「校長時代と変わった活気のみなきった顔をして教室に入るなり体中チョークの粉だらけにして教室を馳けずりまわり、しゃべりまくり、サツとでてゆく。ぼくたちは圧倒されてみているばかり」

中教審と文部省は第三教育改革としようとして、先導的とか、多様化とか、できる子は飛び学年させるとか無茶をいっていますが、高等学校の教科教育は、いろいろな学科特有の理論、真理、美などが体系づけられ、それが全教科として総合された上で、真の人間が育成されるものであることを忘れていきます。又数学のできる生徒も嫌いな生徒も、一緒に同じ教室で学んでこそ教育の実が上がり、人間観、世界観が成長するものであることを知りません。「おれについてこい」とか「○○クラブ」とか、得意の生徒だけを集めて教育して勝つて何になるのでしょうか。必ずすぐ限界がきます。日本の水泳会がそのことを裏書きしていると思いませんか。どうでしょ

う。それは教育とは縁遠い教化とよばれるものです。軍隊教育と同一視してはいけません。あれは教育でなく教化です。それよりも全員の半歩前進が、どれだけ豊かで大切か。そうしさえすれば、必ず鋭才が、しかも万人のためにつかえる人物が、必然的に生れてくるものであります。人間はそういうふうに神様から作られているものです。同志社教育の根底にこれが流れていると確信しています。次の生徒の文は、それをうらずける一文です。

○「先生ぼくは数学が好きです。でも数学のきらいな人が質問したら、ていねいに答えをあげて下さい。ぼくにとっても大切なことをふくんでいます。又数学のできない人にあてたとき、余裕をもってきいてあげて下さい。ぼくもいっしょに考えています。」

○「ぼくは数学はあまりとくいでありません。でも好きになりたいといつも考えています。ところで先生は放課後特別講義をなさいますが、できる者ばかり集まるようで、クラブに入っているものや、数学のできない者は出席しにくいのです。それで劣等感をすごくあじわいます。これでよいのでしょうか、何とか

考えて下さい。」

○「なごやかなふんい気で数学の嫌いな者も、好きなものも、みんな参加できるような授業をして下さい。第三学期でもうお別れです。私達にとって「ああ、勘先生に教えてもらってほんとうによかった」といえるようなフィナーレにして下さいね。」

年末に、ある教育研究会に出席したが、「できない生徒にあてたとき、すぐ答えられぬからとて待ちきれずに他の生徒にあてたり、答を教師が早くいってしまうようなことは、決してしてはならない。最低三十秒はまっことが大切である。」と教えられた。一月になって、この三十秒まっことが至難の業であることを、しみじみ味わっています。こんなことすら守れない私は、再び白墨だらけになった手の平をみて、心から「あかんな」と反省している今日この頃であります。

(前同志社高校校長、現教諭・数学)

大学シリーズ

同志社大学

カラー特集／響けわが自由の鐘

同志社大学構内図

カレッジライフ 生命の樹を育てる

校舎の年輪 赤い煉瓦の一世紀

岩倉の伝統 同志社高商の足跡

健在なり同志社スピリット

ラグビー讃歌(岡 仁詩)

わが街わが青春

キャンパス内外の今昔(児玉実用)

生あらばいつの日か

受難の歴史(和田洋一)

行事 輝かしき日々

国の良心を育てる

新島襄と同志社(住谷悦治)

外人教師群像(オーチス・ケーリ)

われら同志社人 三代の記録

(原田健・桜井忠一・黒岩重吾)

人物展望(青木正太郎)

躍進する同志社大学(山本浩三)

過去から未来へのビジョン(秦 孝治郎)

大学一世紀の年譜(小林 準)

B5判・183頁・1,000円・毎日新聞社発行